

令和元年9月9日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370398

研究課題名(和文) 文学するニーチェ - 散文と詩文の交差する領域に関する文体論的・韻律論的分析

研究課題名(英文) The Literary Man Nietzsche. An Analysis of his Poetical and Prosaic Style

研究代表者

井戸田 総一郎 (Soichiro, Itoda)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：40095576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ニーチェの詩『ゲーテに寄す』に関して、手稿資料に戻ってその生成の過程を、文献学的精緻さを持って分析した。この論文はメッツラー社刊行の論文集『ニーチェと詩』に収録され、書評において高い評価を得ている。詩集『メッシーナの牧歌』の新しい読解について、ニーチェの読んだテオクリトスのテキストなどを参照としながら講演し、この論稿はグロイター社から刊行される。また、グロイター社の『ニーチェ読解』シリーズの学術顧問に選ばれ、ニーチェ研究の国際化に大きく貢献することができている。本研究は現代ヨーロッパにおけるニーチェ研究の深化に関わりながら、日本のニーチェ研究の国際発信力を強める基盤整備に貢献している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在ヨーロッパのニーチェ研究をリードしているのはフライブルク大学に展開しているニーチェ註解プロジェクトであるが、本研究は同プロジェクトと緊密な関係を構築した。このプロジェクトは2020年にニーチェ研究センターに格上げされる。その際に、「日本におけるニーチェ作用史」Nietzsche in Japanの研究企画を、井戸田を中心に組織化することが予定されている。ニーチェの作用は日本の近代における文学・思想・哲学の広範な領域に及び、この企画はニーチェを介した日本近代の精神史の国際発信を目指す。本研究は、このような国際的意義のあるプロジェクトをドイツに展開する可能性を切り開いた。

研究成果の概要(英文)：For a philological approach to analyze Nietzsche's poem "An Goethe" his handwritten notes were used to find out how he worked as a poet and how he achieved his final version. My article about this poem was published by Metzler in a compendium titled "Nietzsche und die Lyrik" and got a high evaluation by Nietzsche specialists. Through a new critical reading of "Idyllen aus Messina" I could proof that Nietzsche read Theocritus' poetry in the original Greek while working on them. A article about this topic will be published soon as part of a new series of Nietzsche research results by de Gruyter of which I was chosen as academic advisor. This project of mine aims to achieve a more profound collaboration between both European and Japanese Nietzsche researchers.

研究分野：ヨーロッパ文学関連、独文学

キーワード：ニーチェ 文献学 テキスト生成 牧歌 文体 韻文 自由精神

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我国におけるニーチェ研究は長い歴史を持ち、蓄積を重ねてきているが、ヨーロッパ特にドイツにおけるニーチェ研究者との共同研究は十分に行われてきたとは言えない。2008年から、ハイデルベルク・アカデミーのプロジェクトとして「ニーチェ註解プロジェクト」が本格的な活動を始め(拠点:フライブルク大学)、ニーチェのテキストの精密な再読が行われ、その成果はグロイター社から順次刊行されている。この企画に関わりを持って具体的な成果をあげている日本人研究者はほとんど存在していない。ニーチェのテキストは散文のみでなく詩文も重要であり、この両者を踏まえた本格的な文体分析も日本では行われていない。このような研究状況を踏まえて、本研究は国際的視点を特に重視して遂行した。

2. 研究の目的

思想(哲学)の領域において、ニーチェほど文体が問題になるケースは存在しない。ニーチェは10歳代の早い時期から多くの詩作を試みており、ヨーロッパ文学の伝統に連なる韻律や脚韻などの詩行を構成する要素を徹底的に学習、肉体化したのである。ニーチェの言説は散文と詩文が張り詰めた緊張状態にある文体を目指しており、この「深みから生まれる表層」の文字の現象面が思想の内容そのものに接触し、独自の反応を起こしている。近年欧米ではニーチェの文体に関する研究が進んでいるが、我国では思想の内容について多くの研究が存在するものの、「表層」の文体に関する本格的・体系的な研究はほとんどなされていない。本研究は、日本語化することが最も難しい文体の領域に入り込んで、文学研究の側からニーチェの思考の構造に迫るものである。

3. 研究の方法

本研究の最終目標はニーチェの文体を体系的に記述した論著を刊行し、同テーマに関する国際コロキウムを組織することである。そのプロセスで生まれる成果は順次、必要に応じて論文・講演の形で発表する。この目標に向かって、ワイマルのゲーテ・シラー古文書館のニーチェ手稿の調査、ワイマルのアンナ・アマリア図書館等におけるニーチェ研究に関する文献調査およびメディア環境に関する研究の情報収集、アンドレアス・ウルス・ゾマー教授(フライブルク大学)を中心とするニーチェの文体分析を専門とする研究者に対するインタビュー等の共同研究、最新の理論に基づくニーチェの文体分析の実践、ドイツの著名な出版社や日本の「文学」などの著名誌に随時成果を発表、以上5つのポイントについて順次実現していく。ワイマルのゲーテ・シラー古文書館およびアンナ・アマリア図書館の全面的協力を得て研究を遂行する。

4. 研究成果

(1)ニーチェの文体に接近するために、少年期から見られるパロディアの手法をまず解明した。ニーチェはパロディアの語源である古代ギリシャ語のパロディアの表現を重視していることから、その語源を調査し、特に *parōdía* の *para* に二つの方向性の意味が、つまり、接近あるいは共鳴と同時に越境、反対、差異化が含意されている点を指摘した。またニーチェのパロディアを理解する上で、旋律を変えずに言葉を変える教会音楽のコントラファクトゥアの影響の重要性についても言及し、その上でパロディアの技法を訓練した痕跡がニーチェの少年期の詩作のなかに存在することを、具体的な分析を通して明らかにした。キリスト教世界で広く知られている讃美歌「*Es ist ein Ros entsprungen*」に詩の形式・響きの模倣から接近して行き、マリア崇拝の言説を内部から穿つ過程を取り上げた。また、あまねく知られているゲーテの詩『さすらい人』IとIIに接近し、遠方から近接へと向かう原詩の巧みな技法を封殺し、独自の静的空間を現出させる経過を分析した。

(2)オリジナルのテキストに形式の模倣などを介して接近しながら最終的にその圏域から離反していくという運動性は、文献学的手法と創作を融合させるニーチェのその後の詩作のなかにも見られることを、詩『ゲーテに寄せて』を具体的に分析することによって実証した。ワイマルのゲーテ・シラー古文書館に、『ゲーテに寄せて』のテキスト生成の再構成にとって重要なニーチェの手稿資料が所蔵されており、本研究はこの資料を詳細に分析することによって、『ゲーテに寄せて』の読解に関して、これまでの研究水準を越える成果をだすことができた。その成果を、2015年ナウムブルクのニーチェ記念研究所で開催された国際会議「ニーチェと詩」におけるメイン講演で発表し、それは2017年にドイツ・メッツラー社から刊行された論文集に掲載された。本論文は詩の生成過程の再構成に成功した事例として、欧米において高い評価を各方面から得ている。

(3)ニーチェの文体に関する研究を深める上で重要な資料は、『ル・フォン・ザロメのためのタウテンブルク手記』(1882年)にある「文体の教義」という十項から成る教説である。そのなかで、「思想を感覚で感じていることを文体で証明すべきである」とニーチェは言明している。これとほぼ同時期に刊行された『悦ばしき智慧』においても、ニーチェは「散文と詩文」という文体に関するアフォリズムを残している。散文(*Prosa*)の語源のラテン語 *prorsus* は、「直線的に進展する動き」の意味を表し、一方、詩文(*Vers*)の動詞形 *vertere* は「回転」「回帰」「反復」などを意味している。ニーチェのアフォリズムは、「直進」と「回転」という異なる原理を機動力にしている散文と詩文を対比的・対立的に描き(アゴン化)、この二つの原理の「いくさ」

こそが「良き散文」そのものであり、このようなアゴンの「楽しみ」を理解しない「散文人間」を強い調子で批判している。このニーチェの文体論は、プラトンが『国家』のなかで展開している詩人（韻文）を理想国家から追放する教説を背景にすると、ソクラテス、プラトン以来のヨーロッパ哲学の言説構築にたいする徹底的な批判であり、既存の哲学を全面否定する機能を担っていた点を明らかにした。ニーチェには、「文体と孤独」というテーマ域が存在するが、それはこの点から今後さらに詳細に研究されるべき領域であると提言した。

(4)「思想を感覚で感じている」ことを証明する文体の実践を、例えば詩『ゲートに寄せて』あるいは『悦ばしき智慧』のアフォリズム「意志と波」(Wille und Welle)などを分析することによって示した。前者の第二連三行目に Not という言葉が選択されていく過程を分析することによって、この詩節において 0 の音が重視されている点を指摘し、「母音の選択」にまで文体形成への繊細な感覚が作動している点を明らかにした。後者では、人間の意志が毛細血管の先端にまで作動している状況が、海岸の細かい石の間をぬって隅々まで波が繰り返し浸透するという比喩の力によって、読者に具体的なイメージとともに伝達されるとともに、Wille(意志)と Welle(波)の音の類似によって、意志という哲学の抽象的・思弁的テーマが感覚的に把握できるように工夫されて点を明らかにした。後者は、ニーチェにおけるメタファーという研究テーマ域に関わり、これについては欧米で豊かな研究成果が存在するが、前者の文体における響き・音のテーマ域は今後さらに深められるべきであり、本研究は、講演や論文を通じてその重要性を認識させることに大きく貢献した。

(5)1886 年に、それまでニーチェの著作に刊行していたエルンスト・シュマイツナーは、その権利をライプツィヒの出版業者フリッチュに譲渡している。ニーチェはフリッチュにおける新しい版の出版に際して、既存の著作について「自己批判の試み」のような序文をつけている。本研究では、この一連の序文が、「著述家・思想家ニーチェ」の段階から「自由精神」への移行を表す重要な試みであることを明らかにした。当時書かれた書簡によると、『悲劇の誕生』(1872 年)、『人間的な、あまりに人間的な』(1878 年)は「著述家・思想家ニーチェ」の段階であり、ニーチェ自身によって刊行された唯一の詩集である『メッシーナの牧歌』(1882 年)、『悦ばしき智慧』(第 1 書～第 4 書 1882 年)は「自由精神」への移行に相当すると言われている。1886 年の『悲劇の誕生』の第 2 版に際して書かれた「自己批判の試み」は、「自由精神」と「著述家・思想家」の二つの地平の差異を読み解く上で重要であり、文体に関わるテーマを鮮明に打ち出している点で注目に値する。それによれば、『悲劇の誕生』のなかに響いている「声」は、「未知の神」ディオニュソスを源泉としているのであるが、実際には学者風の文体、ドイツ人の弁証法好きの重たげな足取り、熱狂的ワグネリアンの劣悪なマナーが支配し、ディオニュソスは姿を隠してしまっている。『悲劇の誕生』では、「ディオニュソス神に仕えるマイナス(狂女)の神秘的魂のようなもの」が、身を潜めるか発話するかを決めかね、慣れない舌でいわばどもりながら語っている。「この新しき魂は詠うべきであったのだ 断じて語ってはならなかった！」というニーチェの表現には、以下のことが対比的に描かれている 「詩人」Dichter の舌(韻文)・「詠う」singen 学識の文体(散文)・「語る」reden。さらに、「自己批判の試み」のなかでは、後者について、「ショーペンハウアーやカントの言い回し」とも表現されている。「ショーペンハウアーやカントの精神、その味覚と根本から異なる新しい未知の価値」を表現するのに、「独自の言葉」を使う「勇気」、「不遜なる大胆さ」が欠落していた、と告白している。本研究はこのように、文体をめぐる問題が「自由精神」と深く関わり、ニーチェの思考の中核を形成していることを明らかにした。

(6)散文と詩文の緊張感のなかで生成するニーチェの文体は、ヨーロッパ哲学史におけるそれまでの言説構築の手法を根本から揺さぶるものであり、当時の知的世界の主流をなす文体から激しく拒絶されることになる。そのような事態をテーマ化している詩『うちひがれし道化(おどけ)』などを、これまでの解釈を批判的に検討しながら、文体をめぐる問題域に結びつける新しい解釈を展開し、欧米で高い評価を得た。以下に、その一部を紹介する

『うちひがれし道化(おどけ)』

ああ、書室の空間に書きたるもの
道化の心持ち道化の手にて書きたるもの、
それを以てわれ書室を飾るつもりなれども?...
其方らは云う「道化の落書は穢れなり -
書室を楔げや真白く
汚れ跡形なく消え去るべきなり！」
何卒お許しを！共に消させたまえ -
われは消しと被いの技に長けし、
われ分別の術心得、なおも生(む)す熟練なり。
然れど、その仕事片付くことあらば、
賢さ誇る貴方らよ、われぜひ見たい、
貴方らの惻巧が書室を汚物にて....

この詩は『プリンツ・フォーゲルフライの歌』に収められている 14 の詩の 9 番目に置かれている。この詩集の冒頭詩『ゲートに寄す』の読解のなかで、人間の認識のなかに潜む「英雄」と

しての「道化(おどけ)」、「真理のヴェール」を剥ぐことなく「表面、襷、皮膚」に立ち留まる勇気を持つ認識者(芸術家)としての「道化」がテーマ化されている。『うちひしがれし道化』は、「道化の手」、つまり「道化」の書記行為を取り上げている点で、非常に興味深いものである。30歳代前後のニーチェは、大学で制度化された「学識誇る文体」を、「古代人(いにしえびと)に負けまいと努力する姿勢」を示さず「学生たちの心をまったく動かさない絶望の研究」の文体として厳しく批判した。しかし、『うちひしがれし道化』では、「絶望」のなかを彷徨っているのは「道化」の方であり、支配する文体の衛生学的観点から見ると「道化の落書は穢れ」以外の何物でもなく、「書室を襪げや真白く/汚れ跡形なく消え去るべきなり！」と命ぜられることになる。詩の第四連は、支配する文体の清掃技術にも実は「道化」も長けていること、簡単に抹殺されるようなものでないことが歌い込まれている。第五連の最後の行は „besch...“ という伏字の形で終わり、読者に言葉を補うように促す形で詩は終わっている。詩の二連目に „schmier“ があるので beschmieren 「汚す、書きなぐる」とも取れるが、前の行の Ueberweisen との韻の関係から見ると、beschmeißen あるいは bescheißen とも読ませようとしていると考えられる。beschmeißen は、「泥などの汚物で汚す」というニュアンスを呼び起こす言葉であるが、bescheißen になると「糞を投げつける」と言うような強い下品な意味になる。ほとんどのドイツ人の読者は後者の bescheißen を連想するに違いない。いずれを読ませるにしても、「賢さ誇る」連中の「伶俐」の文体は「道化」の文体以上に「穢れ」であることを暗示しており、痛烈な批判が込められている詩行である。本研究では、当該の詩の草稿資料も分析し、ニーチェの文体が教養市民の「伶俐」の文体からも、また「抒情味溢れる」詩文の文体からも限りなく離反する軌道を、「落書」の「穢れ」と罵られる孤独の軌道を歩んでいる様相を詳細に分析した。(7)ニーチェ自身の手によって刊行された唯一の詩集『メッシーナの牧歌』(1882年)に関して、これまで十分な分析がなされておらず、それどころかむしろこの詩集をニーチェの二次的仕事とみなす研究が少なからず存在している。本研究では、ワイマルのアンナ・アマリア図書館のニーチェ文庫所蔵の資料の中から、ニーチェが利用したテオクリトスの『牧歌』のギリシャ語原典及びドイツ語対訳を掲載した書籍を分析することによって、ニーチェの『牧歌』はキリスト教的・ロマン主義的解釈に従うのではなく、古代ギリシャの原初的牧歌を呼び出そうとしている点を明らかにした。また、『メッシーナの牧歌』に関するニーチェの書簡等の関連文書を徹底的に再読することによって、これらにたいするこれまでの消極的評価を批判し、『メッシーナの牧歌』によってニーチェが詩的言語の実験を試みていることを明らかにした。この成果を、2018年にフライブルク大学における招待講演(ハイデルベルク・アカデミー、ニーチェ注解プロジェクト主催)において発表し、同発表はYouTube上でも公開されている。また、2019年ドイツ・グロイター社から刊行される『ニーチェ読解第3巻』のなかに、同講演を基にした論文が掲載される。

(8)以上のような研究がドイツにおいて評価され、研究遂行者井戸田は2017年からグロイター社刊行のシリーズ『ニーチェ読解』の学事顧問に選ばれている。また、シュトゥットガルト大学のテキスト分析研究所のニーチェ研究グループの常設メンバーに選出されている。さらに、2020年にフライブルク大学に設立予定のニーチェ研究所(独立研究所)に Nietzsche in Japan(日本におけるニーチェ)プロジェクトを組みこむことが計画されており、井戸田がその推進者となることが決まっている。このように、本研究は国際化に大きく貢献するとともに、日本のニーチェ受容を介して日本の近現代の文学・思想を紹介するプロジェクトをヨーロッパにおいて本格的に展開する可能性を切り開いた。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計5件)

1. Soichiro Itoda: Nietzsches *Idyllen aus Messina*: Zu einer neuen kritischen Lektüre. Ralph Häfner/Sebastian Kaufmann/Andreas Urs Sommer (Hrsg.): Nietzsches Literaturen. Berlin/Boston: Walter de Gruyter 2019 (Nietzsche-Lektüren, Bd. 3). 査読有, (ページ数未定)
2. Soichiro Itoda: Nietzsches literarisches Schaffen — Eine stilistische und prosodische Studie im Spannungsfeld zwischen Prosa und Lyrik. In: The Journal of Humanities, Meiji University, Vol. 24, Tokyo 2018, 査読有, S. 35-46.
3. Soichiro Itoda: An Goethe. Spurenlese einer poetischen Genese. In: Christian Benne, Claus Zittel (Hg.): Nietzsche und die Lyrik. Ein Kompendium. Stuttgart: J.B. Metzler 2017, 査読有, S. 191 – 207.

4. 井戸田総一郎：ニーチェと詩 ナウムブルク国際会議の報告、「文学」2016年5,6月号、岩波書店、査読有、pp.277-287。

5. 井戸田総一郎：文学するニーチェ 詩「ゲーテに寄す」を読む、「文学」2015年5,6月号、岩波書店、査読有、pp. 159-176。

〔学会発表〕(計2件)

1. Soichiro Itoda: Neue Perspektiven auf Nietzsches Idyllen aus Messina. Studium generale der Albert-Ludwigs-Universität Freiburg, in Zusammenarbeit mit der Forschungsstelle Nietzsche-Kommentar der Heidelberger Akademie der Wissenschaften an der Universität Freiburg, 2018年1月20日.

2. Soichiro Itoda: An Goethe. Spurenlese einer poetischen Genese. Internationaler Kongress in Naumburg (Saale) mit dem Thema Nietzsche und die Lyrik, 2015年10月15日.

〔図書〕(計1件)

1. 井戸田総一郎・合田正人・大石直記(共著)：模倣と創造 哲学と文学のあいだで。分担：模倣・創造・書記行為 ニーチェの文体と孤独、書肆心水2017年3月、査読有、pp. 11-103。